【問題提起】第 6 分科会

病院給食を支えるすべての皆さまへ
―いのちを守る食の現場からの問題提起―

◇運営委員　鮫島　彰（神奈川県医労連）
　　二階　司（済生会兵庫病院）
　　青木　博（JCHO 労組中京）
◇助言者　　染原　剛（大阪医労連）

病院給食は、単なる「食事提供」ではありません。それは、治療の一環であり、患者の回復を支え、尊厳を守る医療行為の一部です。特に嚥下機能が低下した患者に提供される嚥下食は、誤嚥や低栄養を防ぎ、命をつなぐ重要な役割を果たしています。

近年、嚥下食は大きな進化を遂げています。食形態の工夫、栄養価の向上、見た目や味への配慮など、「食べる喜び」を取り戻すためのバージョンアップが現場主導で重ねられてきました。こうした取り組みは、管理栄養士、調理師、配膳スタッフなど、病院給食に携わる一人ひとりの努力と専門性によって支えられています。しかし今、その現場はかつてないほどの困難に直面しています。

直営化が進む病院給食の現実

全国で約 20 の病院が、給食部門の直営化に踏み切っています。その背景には、委託会社の撤退、人材不足、採算悪化など、外部委託では立ち行かなくなった現実があります。直営化は「病院として食を守る」という強い決意の表れである一方、病院自体の負担増、人件費や運営コストの上昇という新たな課題も抱えています。現場では、少ない人員で高度な嚥下食対応を行い、衛生管理・栄養管理・アレルギー対応まで求められています。それでも、「患者さんのために」という思いだけで踏ん張っている状況が続いています。

災害時に浮き彫りになる病院給食の重要性

地震、豪雨、台風など、災害が頻発する日本において、病院給食は非常時にこそ真価を発揮します。物流が止まり、電気や水が制限される中でも、患者に安全で適切な食事を提供し続けることは、医療継続の要です。特に嚥下食や治療食は、代替がききません。災害時に「食べられない」ことは、命に直結します。平時から病院給食の体制を守り、専門人材を確保しておくことは、災害対策そのものでもあるのです。

物価高が直撃する病院給食の経営危機

現在、食材費、光熱費、消耗品費は軒並み高騰しています。しかし、病院給食の診療報

酬や食事療養費は、その上昇に十分対応できていません。結果として、病院給食部門は慢性的な赤字に陥り、「削減対象」として扱われがちです。そのしわ寄せは、現場で働く人たちに集中しています。賃金が上がらない、休みが取れない、責任だけが重くなる。それでも患者の前では笑顔を絶やさず、ミスの許されない現場を支え続けています。今、声を上げるときです

病院給食に携わる皆さんの仕事は、決して裏方ではありません。
それは医療を根底から支える、専門性と使命感に満ちた仕事です。
私たちは今、この現状を「仕方がない」で終わらせてはいけません。
現場の声を集め、病院内に、地域に、行政に、社会に届ける必要があります。

- 病院給食の価値を正当に評価する制度の見直し
- 物価高に対応した食事療養費の引き上げ
- 嚥下食・災害対応を担う人材への継続的支援
- 病院給食を守るための直営化・体制強化への公的支援

これらを実現するためには、現場で働く私たち一人ひとりの声が不可欠です。
いのちを支える「食」を、次の世代へ
病院給食の未来は、医療の未来そのものです。
患者が安心して食べられること、働く人が誇りと希望を持てること、その両方が守られてこそ、持続可能な医療は成り立ちます。どうか、孤立しないでください。

同じ思いを持つ仲間が、全国にいます。いのちを支える食の現場から、共に声を上げていきましょう。